

## 黒河下流域の遺跡群

森谷 一樹（総合地球環境学研究所）

黒河中流域から下流域にかけては、遺跡の密集地帯である。特に、この一帯は漢代の長城、烽火台が連なっており、その烽火台の列は西に向かって玉門から安西を通り、はるか敦煌の西、玉門関一帯の疏勒河下流域まで延びている。黒河の下流、当時満々とした居延沢のほとりに広がるオアシスには居延県が置かれ、国家主導のもと、大規模な入植・開発が行われた。また、匈奴を攻撃するため、さらにはオアシスの入植者を守るための軍事機関も設置された。中島敦の小説で有名な悲運の將軍李陵も、この居延から出撃していったのである。

漢代以降、この黒河下流域が、国家にとって重要な意味を持った時代といえば、西夏・モンゴル時代である。この一帯で最大の規模を誇る黒城こそ、このオアシスで最重要、現在のエゼネー観光ツアーでも目玉となっている遺跡である。黒城のほかにも、五塔・二塔・一塔など、この時代の仏塔が点在していて、当時の仏教隆盛の面影を偲ぶことができる。

この居延オアシスの遺跡調査は、19世紀の末から行われたが、これは西洋諸国の中国西北進出を視野に入れた“探検調査”と深い関係がある。最初に、1886年にロシアのポターニンが砂に埋もれた黒城を見つけ出した。続いて1908年、ロシアのコズロフが黒城を訪れ、多数の文物を獲得した。黒城が宝の城であるという情報は瞬く間に広まり、1915年にはイギリスのスタイン、1923年には“ウォーナー・リスト”で日本でも著名なアメリカのウォーナーが、それぞれ黒城一帯を訪れ、調査している。

最も重要な調査は、1927年に結成された、ヘディンを団長とする西北科学考察団によるものである。外国探検隊による相次ぐ文化財流出に危機感を抱いた政府は、外国探検隊単独による調査を禁止した。そのため、中国とスウェーデンとの合同調査団として結成されたものが、西北科学考察団である。実際は、中国人・ドイツ人・スウェーデン人・オランダ人からなる多国籍部隊であり、その専門領域も、地理学・考古学・人類学・動植物学などと多岐にわたるものであった。このような総合的学術調査隊が組織されたのは、当時としては、極めて画期的なことだったのである。

西北科学考察団の考古学

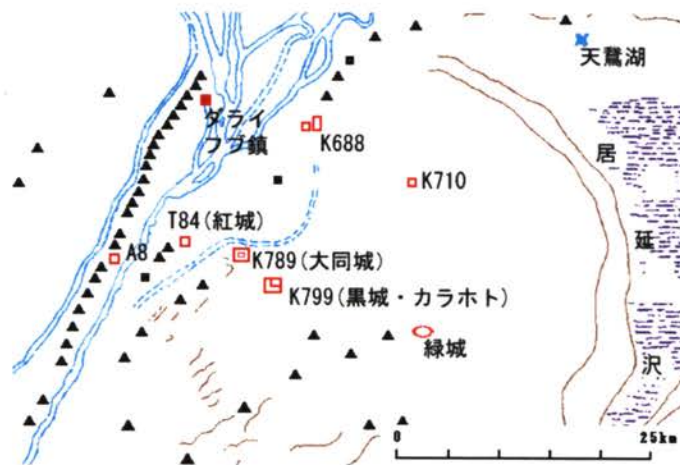


図1 エゼネーオアシス下流域の遺跡分布図  
(魏堅『額濟納漢簡』, 広西師範大学出版社 2005 を改変)

担当は、スウェーデン側はベリイマン、中国側は黄文弼<sup>こうぶんひつ</sup>であった。組織的な調査を行って成果を挙げたのは、ベリイマンの方であった。彼は、黒河下流域から中流域までを踏査し、黒河沿いに点在する遺跡を調査してまわった。特筆すべきは、漢代の遺跡 30 箇所から発掘した木簡、いわゆる居延漢簡を約一万点発掘したことである。木簡の存在は、ヘディンやスタインたちによって、楼蘭やニヤ、敦煌にて既に発掘されていたが、この一万点もの木簡は桁違いの量であり、実際、漢代辺境研究は、この居延漢簡によって格段に進歩を遂げたのである。ベリイマンが発掘した居延漢簡（旧簡）は、文字が書かれている考古資料の国外持ち出しを禁じた政府の方針により北京に送られ、のち、戦乱による数奇な運命を経て、現在台湾の中央歴史語言研究所に所蔵されている。

写真1が A8 遺跡（北緯 41° 47' 35.7" ，東経 100° 56' 54.6" ）である。バスで黒城に行く道すがら、黒河を渡ったことを覚えておられると思われるが、その渡河地点から 6.6km ほど南に位置する。居延漢簡の分析から、ここには「甲渠候官」と呼ばれる官署が置かれていたことが判明した。候官とは、烽火台を統括する機関で、居延オアシスにはこの甲渠候官の他に、居



写真1 A8（甲渠候官）遺跡（著者撮影）

延候官・卅井候官・殄北候官が置かれていた。現在でも A8 の北方と南方に、隣接する烽火台——いまとなつては単なるマウンドにしか見えないが——を、かすかに見ることができる。ドライブ鎮から車で A8 遺跡に向かうとき、車窓からこのようなマウンドが、約 2km おきに並んでいたことに気がついただろうか。実は、これが崩れて砂に埋まった漢代の烽火台の跡である。そのうちのいくつかは近年発掘され、新たな漢簡（額濟納漢簡）が公表された。烽火台の列と、今は風化してしまつてほとんど見ることができない長城、そして天田と呼ばれる侵入者・逃亡者の足跡をチェックするための砂場が、主な防衛システムのための機関である。

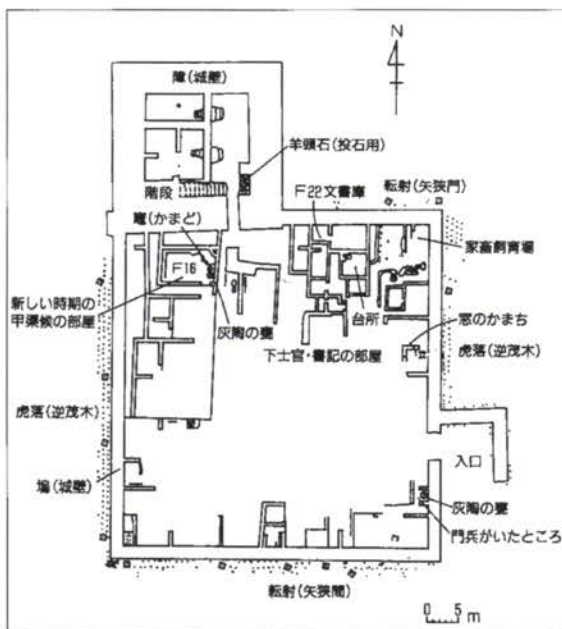


図2 甲渠候官復元図

（大阪府立近つ飛鳥博物館『シルクロードのまもり——その埋もれた記録』1994 より）

遺跡の本格的な調査は、70 年代に、甘肅省の文物考古所によって再び行われ、このとき初めて遺跡の全貌が明らかになった（図2）。この遺跡は、二つの部分から構成されている。北側の堅牢な囹郭に囲まれた部分と、南側の居

住区である。最近では前者を障、後者を塙と呼び習わすのが一般である。障は日干しレンガで作られている。このレンガの一边が、漢代の一尺である 23cm に相当するため、このサイズのレンガは漢代に作られたことがわかる。さらに積み方にも特徴があり、三段ごとに補強のための草をはさんでいる。エクスカージョンで行った T84 (紅城) と比較すると、両者が同じ構造で作られているのがよくわかる (写真2)。

この遺跡が建てられたのは、前 102 年ごろ。居延に遮虜障が築かれ、この地の開発が始まった時と、ほぼ同時だと考えられる。いつまで使用されたかについては、はっきりとはわからないが、後漢初期の建武年間に一旦放棄された後、しばしば再利用されたものと考えられる。居延漢簡の下限は、晋の年号が記されたものが一本だけ見つかっており (“晋簡” と称すべきものであろうが)、この時代にもこの建物が使用されていたことがわかっている。ただ簡の数から考える限り、何らかの官署がここに設置されて恒常的に使用されたわけでは、どうもないらしい。



写真2 レンガの積み方 (左: T74 の南壁を側面から。右: A8 の北壁)

候官の上級機関として、都尉府と呼ばれるものがあつた。甲渠候官を管轄する都尉府は居延都尉府という機関なのだが、この官署がどこにあるのか、どの遺跡がそれに該当するのか、まだ確定していない。現在のところ、挙げられている候補地は 2 箇所、K688 と K710 である。K688 (北緯 41° 54' 31.7" , 東経 101° 11' 47.0" ) はドライブブ鎮から東へ 12km にある囲郭遺跡である (写真3)。その城壁の上には、既に巨大なタマリスクコーン

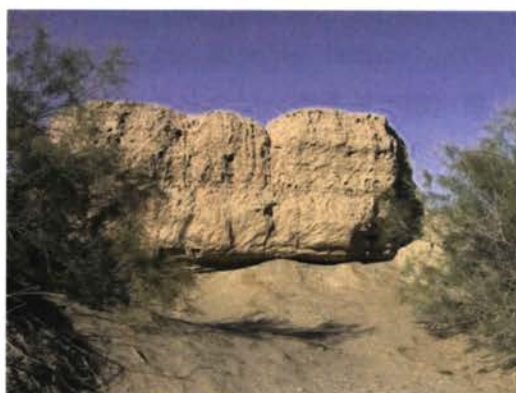


写真3 K688 遺跡南壁

が形成され、この遺跡がかなり早い段階で放棄された可能性を示唆している。

規模は 133~139m×128m、壁は高いところが 5m ほどで、保存状態はかなり良い。しかし、残念なのは出土遺物に乏しいことで、めぼしいものは残っていない。ただ、注目すべきは、この遺跡に門の跡が無いこと (図3参照)、このことは遺跡の性格を考える上で興味深い。

K688 付近では、他に遺跡の存在は知られていなかった。しかし、近年、西北科学考察団の報告には載せられていなかった遺跡の存在が公表された。それによると、K688 のすぐ東に、南北 506m、東西 180m の大きな遺跡が存在した、と言う。この遺跡は居延オアシスの漢代遺跡の中で最大となるものであるが、残存状況は極めて悪い。内部も浸食が激しいために、地表面を見る限りでは、どのよ

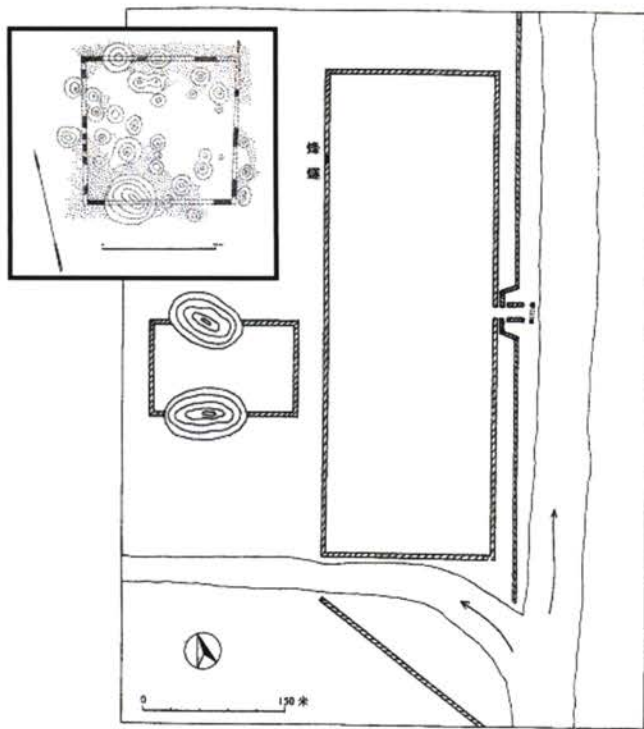


図3 K688 平面図 (左上: Sommarström 1956, 右: 呉 2005)

うな建造物が存在したのかはわからなかった。報告によると、東側には門が設けられ、さらにこの遺跡の南北には村落遺跡や城壁の跡が広がっているとのことである。この遺跡の東と南には水が流れた跡があり、水運にも便利な位置にある。ということから考えると、こちらの巨大遺跡の方が都尉府遺跡に相応しいと、私には思われる。

K710 (北緯  $41^{\circ} 52' 43.9''$ , 東経  $101^{\circ} 17' 01.2''$ ) は K688 とほとんど同じ大きさ (各辺: 127m, 122m, 126m, 131m) である。門の前には人民政府が立てたプレートがあり、そこには

「居延都尉府址」と書かれている。筆者が調査に訪れたときに同行した頂いた魏堅氏は、この遺跡は都尉府跡ではなく、倉庫の跡だ、と述べておられた。確かに内部には、窖藏<sup>こうざう</sup>とよばれる穀物を蓄えておくための穴がいくつか存在している (写真4)。ただ、都尉府という軍事拠点に倉庫が付設されていても、問題はないとも思われるのだが。

外壁は、高いところで 1m ほどしか残っていない。遺跡の内部もかなり砂に埋もれていた。所々に石臼が転がっていて、確かに、都尉府という軍事拠点のイメージからは若干離れた光景が広がっている。さらに、この K710 の郊外にも農耕地跡が広がっている。そこでは、漢代の土器のみならず、西夏・モンゴル時代の遺物も見つけることができた。いかつい K688 の様相とは趣を異にする印象を訪れた研究者は抱くようで、K710 は居延都尉府跡ではなく居延県跡だとする説が、現在では有力となっている。



写真4 K710 遺跡 (右は窖藏の跡)

さて、最も興味深い遺跡は、黒城からさらに奥へと進んだところにある囲郭遺跡、緑城 (北緯  $41^{\circ} 43' 47.0''$ , 東経  $101^{\circ} 16' 38.0''$ ) である。この一帯には遺跡が点在しており、それらはまとめて「老高蘇木遺跡 (モンゴル語で緑色の廟、という意味。それゆえ「緑廟遺跡」とも呼ばれる。図4参照)」と名付けられていたが、まず、この囲郭遺跡を単体で取り上げ「緑城遺跡」として紹介したの

は、景愛氏である。景愛氏は緑城遺跡を西夏・モンゴル時代の耕地跡と考えるのであるが、一方李并成氏はこれを漢代の居延県跡であるとする。両者の見解は、時代も違えば、用途も異なっている。

実際に現地を見た限り、囲郭の内部には住居跡が密集していた、ということはなかったようだ。景愛氏の言うとおりに、この囲郭は農耕地を囲んだものと解釈するのが妥当ではないかと思われる。李并成氏が、この遺跡を漢代のものとする根拠は、城の下層から漢～晋代の土器が発見したことによる。ただ、この遺跡の初築が漢代であったとしても、これが漢代の居延県跡である確実な証拠はない。事実、緑城からは新石器時代の墓がみついているとのことである。この一帯が使用された起源は、漢代以前に遡るのである。



写真5 緑城：北西壁から城内を望む

ただ、緑城という囲郭には触れないものの、この緑城の南にある遺跡群（本稿では「緑廟遺跡」と呼ぶことにする）は、スタイン以来、調査の対象とされてきた。ベリイマンは、この地が果たしてスタインが訪れた地点と同じであるのか確信が持てなかったようだが、早逝したベリイマンに代わって発掘報告を執筆したソマストロームは、スタインとベリイマンの間に見解の相違はあるものの、スタインが名付けた寺院遺跡 K.E.XIX はベリイマンの K811 と一致すると考えている。

今回の調査でソマストロームの地図がかなり正確であることがわかったので、現地で取得した遺跡の GPS データを地図と重ね合わせてみた。すると、緑廟遺跡の土墩墓群（写真6。『額濟納旗志』（方志出版社、1998）755頁の言う五銖錢・大泉五十（王莽の新代（8～23年）のみに流通した錢。時代を限定する手がかりになる）が出土した「緑城墓群」かもしれない。北緯  $41^{\circ} 43' 25.9''$  ,



図4 緑城・緑廟遺跡地図（額濟納旗文物管理所作成。景愛『沙漠考古通論』紫禁城出版社1999より）

東経  $101^{\circ} 15' 59.3''$  ) は、ベリイマンの言う Town Ruin T100 に一致した。つまり、ベリイマンはこの土墩を住居跡と誤解したらしい。この南にある烽燧（北緯  $41^{\circ} 42' 55.4''$  , 東経  $101^{\circ} 15' 34.5''$  ) も T103 に同定された。すなわち、図4中央の遺跡密集地帯は T100、南の「烽台」は T103 と考えられるのである（とすると、「双塔」がソマストロームの言う Twin Tower T102 となる）。



写真6 緑廟遺跡南の土墩墓群(T100)

結論を言うと、スタインもベリイマンも、緑城のすぐそば、緑廟遺跡までは到達していたのである。スタインは既にこの一帯に水渠があることを指摘しているし、ベリイマンも T100 の北東方向にいくつか遺跡の存在を確認し、この一帯がかなり広大な農耕地であったとの認識を示している。しかし、両者共に、このあたりに囲郭が存在したとは言っていない。楕円形という珍しい形態をした緑城を、囲郭として認識していなかったのではなかろうか。呉 2005 は、緑廟の西南 500m に漢代の障（西・南壁に長さ 65.5m、高さ 2.5m の城壁が残ると言う。サイズは K688・K710 のちょうど半分！）が存在すると言う。スタイン・ベリイマン、それと近年の調査を比較してそれぞれの遺跡を同定し、この地域全体を把握する必要があるのである。

カラホトを取り巻く旧河道のひとつが、この地域のそばを流れ、東南に向かい居延沢に注いでいた、と想定すると、居延オアシス南部における緑城地域の重要性は高いことが予想される。なにしろ、緑城から東南の居延沢に至るまでの地域は、スタインもベリイマンも訪れていない、未知の領域なのである。漢代や西夏・モンゴル時代に、それぞれ緑城一帯の地域が——緑城を単独の遺跡として捉えるのではなく——時代ごとにどのような土地利用がなされていたかについて、さらに広い視点から考えなければならないのである。この問題は、わたしに課せられた宿題である。

カラホトを取り巻く旧河道のひとつが、この地域のそばを流れ、東南に向かい居延沢に注いでいた、と想定すると、居延オアシス南部における緑城地域の重要性は高いことが予想される。なにしろ、緑城から東南の居延沢に至るまでの地域は、スタインもベリイマンも訪れていない、未知の領域なのである。漢代や西夏・モンゴル時代に、それぞれ緑城一帯の地域が——緑城を単独の遺跡として捉えるのではなく——時代ごとにどのような土地利用がなされていたかについて、さらに広い視点から考えなければならないのである。この問題は、わたしに課せられた宿題である。

#### 参考文献

- 李并成 1998 「漢居延县城新考」、『考古』1998 年第 5 期。  
呉祜驤 2005 『河西漢塞調査与研究』、文物出版社、北京。  
Sommarström, B. 1956/1958 Archaeological researches in the Edsen-gol region Inner Mongolia, Vol.1 and 2, Statens etnografiska museum, Stockholm  
Stein, A. 1928 Innermost Asia : detailed report of explorations in Central Asia, Kan-su, and Eastern Īrān : carried out and described under the orders of H.M. Indian Government, Clarendon Press, Oxford